

# 外国人のみた日本 日本見聞（カルチャー・ショック）

著者	張 建新, 丁 可[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	137
ページ	61-61
発行年	2007-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005313">http://hdl.handle.net/2344/00005313</a>

# カルチャー・ショック

## 外国人のみた日本



Zhang Jianxin  
出身地：中国・湖北省  
所属：上海交通大学国際与公共事務学院副教授  
日本滞在：2006年4月～2007年1月

## 日本見聞

張建新

今年の四月に、上海から千葉へやってきました。それは、桜が満開する頃でした。山一面の花を目の当たりにしながら、淡い香りのなかを散歩することは、大変心地よいことでした。桜のシーズンがとても短いことを考えれば、なんと幸運に恵まれていただろうと、今さらながら感じています。

中国と日本は、「二衣帯水」の隣国であり、また儒教の文化を共有している国でもあります。このため、来日前に、私は両国の生活様式や国民の発想があまり変わらないだろうと想像していました。しかし、「百聞は一見に如かず」。実際に生活していると、中国と日本の違いは、少しずつ鮮明に見えてきました。

八月中旬に、私は家族や友人と富士登山のツアーに参加しました。団員は、我々五人を除いて、すべて日本の方でした。これは、日本の社会を直に観察する良い機会となりました。

その日は、富士山の山腹にある五合目から登山をはじめました。中国でこのようなツアーが催されたら、我々は、競い合うかのように、山頂を目指してわっと駆け出したらに違いありません。お年寄りがまだ山腹付近をゆっくり歩いているのに、若い人は、もう山頂に登ってしまったかもしれません。

しかし、日本でのやり方は中国とはとても対照的でした。このツアーでは、あるプロの登山家が団長を務めていました。彼は、主に登山のリズムを把握しながら、みんなを引率していたのです。彼は、杖を両手にして、リュックを背負いながら、一番先頭を歩いていました。およそ一時間ごとに一回、必ずみんなに体操をしてもらいました。おかげで、お年寄りでも、休憩をとり、登山の力を蓄えることができました。最後に、ツアーに参加した全員は、とてもリラックスした気分で富士山に登れました。

これは、小さな出来事でしたが、私にとって日本人の組織性と集団性をつくづく感じさせられる重要な体験でした。

日本は、中国と同様に仏教を信奉する国です。しかし、この仏教は中国とだいぶ性格が違うようです。苦行に取り組みお坊さんといれば、髪の毛を生やし、奥さんをもらい、肉や酒をたしなむお坊さんも少なくないのです。

また、私の観察では、日本から発祥したためか、仏教以上に、神道のほうが、日本社会に浸透しています。神社の雰囲気は、より厳かです。神社では、様々な神様が祭られているとともに、先祖も供養されているようです。日本人は、重要な祝日や人生

の節目にあたり、必ず神社を訪れます。私にとって、神道の三つの点がとても不思議です。

第一に、どここの神社へ行っても、神様の彫像が見えないことです。神に決まった形がなければ、日本人一人一人にとっては、どんなに多彩な神がイメージされていることでしょうか。

第二に、神の数が大変に多いことです。私の知っている限りでも、電気の神様、タバコの神様、学問の神様、縁談の神様……。きつと、神の世界でも、人間社会のような細かい分業関係が成立しているのでしょうか。

第三に、一部の神社では、なくなった方なら、善人でも、悪人でも、だれでも神様になれることです。アジアの人々にとってみれば、決して許し難い人でも、神様として祭られているのです。

このようにみると、中国と日本は、隣人でありながら、生活や宗教、文化の面で、実に様々な違いがあります。我々は、このような違いを認識しなければなりません。中国と日本が「二衣帯水」の隣国として、友好関係を築いていくことは、必ずや双方のためになると確信しています。

（前海外客員研究員／訳＝丁可）